

病虫害発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イネミズゾウムシ	並 並 やや少 や 並 並 並	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ アブラムシ類	並 やや多 並 並 並 やや多
ウリ科野菜	モザイク病 べと病 褐斑病 うどんこ病 疫病 つる枯病 炭疽病	並 やや多 やや少 や 並 並 並	モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	並 やや少
			野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミナミキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ シロイチモジヨトウ	並 並 並 やや少 や 並
果樹全般	カメムシ類	やや多			

気象予報

1か月予報（予報期間 5月23日～6月22日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、高い確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >

【気温】近畿地方



【降水量】近畿地方



【日照時間】近畿地方



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (°C)	月降水量(平年値) (mm)
6月	和歌山 23.0	和歌山 188.6
	潮岬 22.1	潮岬 351.9

I. 水 稲

1. いもち病（苗いもち、葉いもち）

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 県南部の早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 県北部、県中部の普通期栽培地域では、「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」などの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱施薬剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

（1）予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並

縞葉枯病 発生量 やや少

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0.2頭）であった。

② 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市4.1%（平年8.8%）、かつらぎ町4.0%（平年11.0%）であった。

③ 県北部および中部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は0%（平年12%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

③ 第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。

3. ツマグロヨコバイ

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にツマグロヨコバイに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

4. セジロウンカ

（1）予報内容 発生時期 並 発生量 並

（2）予報の根拠

① 5月20日現在、県内の予察灯（紀の川市、上富田町、那智勝浦町）への飛来は認められていない（平年の5月1～20日の誘殺数：紀の川市0頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0.4頭。初飛来の平年：5月29日）。

（3）防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時にセジロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。
- ② フィプロニル剤に対する感受性低下が報告されている。

5. トビイロウンカ

- (1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月20日現在、県内の予察灯（紀の川市、上富田町、那智勝浦町）への飛来は認められていない（平年の5月1～20日の誘殺数：いずれの予察灯も0頭。初飛来の平年：6月28日）。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 田植え時にトビイロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。
 - ② イミダクロプリド剤に対する感受性低下が報告されている。

6. イネミズゾウムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0頭）、上富田町56頭（平年25.7頭）、那智勝浦町8頭（平年16.9頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① イネミズゾウムシに効果がある育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは成虫が1株あたり0.5頭を越える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<ウリ科野菜>

1. モザイク病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（キュウリ：平年3%、スイカ：過去9年の平均0%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（平年：いずれも0%）であった。
 - ③ アブラムシ類の発生は平年並と予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① アブラムシ類の防除を行う。

2. べと病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は38%（平年40%）、発病葉率は4.3%（平年5.7%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は67%（平年58%）、発病葉率は25.5%（平年12.7%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は15%（平成6%）、発病葉率は0.8%（平成0.3%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は17%（過去4年の平均78%）、発病葉率は3.5%（過去4年の平均19.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。

② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。

③ 資材に付着した病原菌の胞子が伝染源になるので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

4. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は23%（平成19%）、発病葉率は1.6%（平成1.6%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は67%（平成86%）、発病葉率は17.3%（平成27.0%）であった。

③ 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

④ 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

⑤ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培やトンネル栽培では風通しを良くし、薬剤防除は薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

5. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。

② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

6. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

7. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均0%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均0%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 6月以降の露地条件で降雨が続くと、病斑上の胞子が雨滴などで飛散するため被害が拡大しやすい。降雨前の予防散布に努める。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の生息葉率は、モモアカアブラムシ0%（平成0.6%）、ワタアブラムシ0%（平成0.1%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は63%（平成59%）、生息葉率は0.0%（平成5.5%）であった。
- ③ 黄色水盤（紀の川市）の5月1～20日の飛来数は204頭（平成168頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は22%（平成13%）、生息葉率は1.3%（平成1.5%）、ナミハダニの発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は88%（平成68%）、生息葉率は5.0%（平成12.2%）、ナミハダニの発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率25%、生息葉率4.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の発生ほ場率は22%（平成27%）、生息葉率は1.3%（平成7.1%）であった。
- ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は75%（過去6年の平均46%）、生息葉率は10.3%（過去6年の平均4.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率5%、生息葉率0.4%）であった。
- ② 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率8%、生息葉率1.0%）であった。
- ③ 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去6年の平均：発生ほ場率19%、生息葉率2.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成6%）、生息葉率は0%（平成0.2%）であった。
- ② フェロモントラップによる5月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平成3.2頭）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
- ③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 5月下旬までに薬剤散布を実施していないほ場では早急（6月上旬）に防除を行う。
- ② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、1回目散布後の累積降水量が250mm程度となった時点で次の散布を行う。
- ③ 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は13.3%（平年10.2%）であった。
- ② 予察ほ場（無防除、有田川町奥）において、春葉での初発は5月20日（平年5月22日）であった。
- ③ 前年10月中旬の春葉発病の発生ほ場率は34%（平年17%）、発病葉率は0.7%（平年0.7%）であった。
- ④ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 銅水和剤の予防散布を行う。散布時には薬害軽減の策を講じる。
- ② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 5月中旬の100葉あたりの雌成虫数は、予察ほ場（無防除、有田川町奥）では1.1頭（平年23.8頭、多発年であった令和元年のデータを除いた過去9年の平均0.7頭）、マシン油乳剤を散布している慣行防除園では0頭（平年0頭）であった。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行うと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 やや早

第1世代 1 齢幼虫最盛期 5月26～30日

同 2 齢幼虫最盛期 6月17～27日

同 雌成虫初発日 6月20～24日

発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）での第1世代1齢幼虫の初発は5月13日（平年5月16日）であった。
- ② 前年10月における発生ほ場率は7%（平年5%）、寄生果率は0.2%（平年0.4%）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 多発ほ場では、2齢幼虫最盛期にネオニコチノイド系や有機リン系等の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、由良町）における黄色粘着トラップによる5月11～20日の誘殺数は31頭（平年30.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生消長調査の結果を参考に、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）では5月中旬の寄生新梢率は7.0%（過去6年の平均1.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 各ほ場の発生状況を把握し、適期防除に努める。

<カキ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の「富有」での発生ほ場率は24%（平成11%）、発病葉率は0.2%（平成0.3%）であった。

- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 伝染源となる病斑上の病原菌は、6月以降活発に形成され伝染を繰り返す。病原菌は葉裏の気孔から侵入するため、薬剤防除にあたっては葉裏にも丁寧に薬液を散布する。

2. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は47%（平成44%）、発病葉率は4.1%（平成5.6%）であった。

- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 病原菌の飛散は5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。

- ② 5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は88%（平成65%）、発病葉率は9.0%（平成13.1%）であった。

- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 病原菌による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。また、病斑上に新たに形成された胞子により、8月中旬以降に二次感染を繰り返す。

- ② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

4. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月1日～5月20日の誘殺数は0頭（平成9.4頭）であった。

- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月1日～5月20日の誘殺数は3頭（平成9.3頭）であった。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期は新成虫飛来期の6月中下旬である。

6. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の「富有」での発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率17%、寄生花蕾率0.7%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期である6月上中旬に薬剤を散布する。多発園では薬液を丁寧に散布する。

<モモ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬の発生ほ場率は80%（平成59%）、発病葉率は3.1%（平成2.7%）であった。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防風ネット、防風樹の設置などの防風対策を励行する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生ほ場率は0%（平成15%）、寄生枝率は0%（平成1.4%）であった。
- ② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の少し前に薬液を散布する。
- ② 近年の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月1～5日頃、クワシロカイガラムシが7月11～15日頃である。

<キウイフルーツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における5月中旬のPsa3系統の発生ほ場率は0%（前年2%）で

あった。前年に発生が認められた耕作放棄園でも葉の発病は認められなかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 新梢の萎れ・黒変や樹液の漏出がみられる枝は、前年枝の基部から切除する。
- ② 作業に使用した器具類（ハサミ、ノコギリ等）は70%エタノールで消毒する。
- ③ 風当たりの強い園では、防風対策を行う。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市粉河の予察灯での5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが67頭（前年0頭、過去9年の平均152頭）、ツヤアオカメムシが191頭（前年11頭、過去9年の平均56頭）であった。
- ② 有田川町奥の予察灯での5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが3頭（前年0頭、過去6年の平均152頭）、ツヤアオカメムシが285頭（前年15頭、過去6年の平均405頭）であった。
- ③ みなべ町東本庄の予察灯での5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが104頭（前年80頭、平年223頭）、ツヤアオカメムシが2,247頭（前年398頭、平年1,386頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生および被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。スモモでは山林に隣接する園地でカメムシ類の飛来する時期が早いので、このような園地では特に注意が必要である。
- ③ 今後の発生動向については、農業・環境鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。
- ④ 令和2年度病虫害防除技術情報第2号（5月22日発表）を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○ 農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○ 和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780